

# 「受胎告知」に描かれたマドンナリリー

中村祥二（会長）

## マドンナリリー

Madonna Lily (*Lilium candidum* L.)

学名の種小名 *candidum* は「純白の、清い」という意味のラテン語で「純白のユリ」を表現している。紀元前 1500 年ごろの古代ギリシャではマドンナリリーがしきりに描かれていた。中世には僧院の薬草園で栽培され、それらが野生化したと言われる。野生型はギリシャ、トルコ、シリア、レバノン、イスラエルで確認されている。世界でもっとも古くから栽培されていたユリである。ところが、このユリは日本ではなかなか目にしない。本来、石灰質の乾燥地に生育するユリで日本での露地栽培は難しいと言われる。

マドンナリリーは長くホワイトリリーと呼ばれていたが、19 世紀後半に白いテッポウユリが日本からヨーロッパに輸出され教会で用いられるようになったため、1886 年にマドンナリリー (Madonna Lily : 聖母マリアを表す) に改めるように提唱された。



マドンナリリー

## 受胎告知

「受胎告知」の感動的な場面はフラ・アンジェリコ、エル・グレコ等をはじめ多くの画家が競うように描いている。彼らは処女と純潔を画面に強調しようとしてこの純白のユリを大天使ガブリエルに持たせた。1618 年には教皇は、「無原罪の御宿り」処女懐妊をテーマとする絵画には白いユリを描き込むよう厳しい布告をしたほどである。絵画には雄しべを除いて描かれたものもあった。

私は数ある「受胎告知」の中でも 15 世紀後半に描かれたレオナルド・ダ・ヴィンチの絵に一番強い印象を受ける。先年、イタリア・フィレンツェのウフィツィ美術館の絵画などを詳しく見る機会があった。

四つの福音書の中で、イエスの誕生前後の事柄をもっとも詳しく記しているのは「ルカによる福音書」の記述である。そしてその記述がレオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」の図像表現によく表れている。



受胎告知 レオナルド・ダ・ヴィンチ

ウフィツィ美術館

「神から遣わされた天使ガブリエルはマリアのところに来て言った。…『あなたは神から恵みを頂いた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子といわれる。』… マリアは天使に言った。『どうしてそのようなことがありえましようか。わたしは男の人を知りませんのに。』…マリアは言った。『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。』そこで、天使は去って行った。」

ここにはマリアの驚きと困惑の様子が表れている。聖書においてガブリエルは「神のことばを伝える天使」であり厳しさの中にその凜とした美しい表情が際だっている。

この絵には幾つもの植物が描かれていて、中でも目立つのがマドンナリリーである。聖母マリアに受胎を告げる大天使カブリエルが左手に支えている。



「受胎告知」に描かれた  
ガブリエルとマドンナリリー（部分）

## マドンナリリーの香り

マドンナリリーはどのような香りがするのだろうか。6月下旬に訪れたローマやフィレンツェでは他の白いユリはあるものの、目指すマドンナリリーはどうしても見つからなかった。ある年の6月、香りの良い花の普及に熱心な大田花きの宍戸純さんの誘いもあって札幌の百合が原公園を訪れた。露地ではまだつぼみの状態なので、管理栽培された温室で咲いているマドンナリリー（変種のサロニカエと栽培種のカスケードストレイン）の話を伺うことができた。

茎の丈は80cmから180cmで5輪から十数輪の花をつける。花は直径10cm、長さ6cmほどで、花色は蠟細工のようなやや透明感のある純白で、雄しべは黄金色で美しい。

昼と夜、更に翌朝の香りも調べた。香りはスズラン、ヒヤシンス、ツツジのオオムラサキ、それに蜜様の甘さがあり、ヤマユリにあるパラクレゾール様の葉臭さは全く感じられなかった。夜はヒヤシンス様がどんどん強まってくる。朝になるとヒヤシンス様の香りは弱くなり蜜様の香りが強まってきた。綺麗な香りが広がってくる。爽やかで品があり濁りのない花の清らかな姿に似合った香りと言ってよい。

マドンナリリーを詳しくお知りになりたい方には6~7月に百合が原（ゆりがはら）公園訪問をおすすめしたい。純潔の象徴の花に出会うことができる。

#### 参考資料

新共同訳聖書 ルカ伝 1.1 日本聖書教会（1988）

園芸植物大事典2 小学館（1994）

ユリ栽培の手引き 百合が原公園管理事務所（2005）

中村祥二 花の香りの復権 最新農業技術 花卉 vol.1 p361（2009）